

Newsletter

August 2016

<http://www.aack.or.jp> <http://www.aack.info>

目次

松林公蔵前会長、松沢哲郎現会長
京大退職を機に「山と学問、そしてAACK」
を語る

.....1

妙高山外輪三田原山柄沢の雪崩 (2015年2月)
横山宏太郎・杉山 茂 (京大山岳部OB)5

第37回雲南懇話会 (2016年6月25日開催)

講演概要

山岸久雄、前田栄三、安仁屋政武8

お知らせ10

会員動向10

編集後記10

松林公蔵前会長、松沢哲郎現会長 京大退職を機に「山と学問、そしてAACK」を語る

AACK 現会長の松沢哲郎さん、前会長の松林公蔵さんが今年3月、そろって京大教授を定年退職した。霊長類研究所教授の松沢さんは、野生チンパンジーの観察に実験的手法を取り入れ、「比較認知科学」という学問領域を開拓した。東南アジア研究所教授の松林さんは、人間の老化の問題を病院のベッドサイド（臨床）から離れ、自然環境や文化的背景からトータルにとらえようとする「フィールド医学」を提唱した。「未知の領域へ道筋をつける方法は山登りから学んだ。私たちの研究と山は切っても切れない」という2人に「山と学問、そしてAACK」を語り合ってもらった。聞き手には盟友である瀬戸嗣郎さんにも加わってもらった。(榎原雅晴)



<松沢さんは1969年に京大文学部、松林さんは70年に京大医学部入学。ともに山岳部員として、青春の同じ時期を山登りに明け暮れた>

——高校から山登りを？

松沢 都立両国高校で山岳部員だった。6歳上の兄が山岳部員だったので「山岳部なら、入ってすぐレギュラーになれるよ」とリクルートされた。高校では砂を詰めたキスリングを担いで

階段を上り下りしたり、丹沢の尾根をひたすら縦走したり。あんまり面白くなかったね。69年に東大入試がなく、入学した京大も大学紛争で半年くらい授業がなかった。やることがないので「京都にも山岳部くらいあるだろう」と門をたたいた。今西錦司さんや桑原武夫さんのことも知らなかった。大学の授業が正常であれば山登りをしていなかったかもしれない。「1浪しても、京大山岳部に行きたい」と思っていたゼンカ（高木真一さん）とは違う。



松林公蔵前会長（左）、松沢哲郎現会長（右）

外国隊を次々治療



高所肺水腫で重症となった西独隊シエルパの治療を続ける
松林公蔵・学術隊医（奥の帽子姿）

シエルパ命拾い「サンキュー」

と、その命を救った。その時、シエルパは「サンキュー」と叫び、涙を流した。その瞬間、松林は「これでいい」と思った。

高所肺水腫（肺水腫）は、高所登山でよく見られる病気。酸素不足によって肺の血管が拡張し、液体が肺の組織に滲み出ると、呼吸が困難になる。重症化すると命を落とす危険がある。シエルパは、高所登山中にこの病気で重症となり、松林隊医に治療を受けた。松林は、シエルパの命を救ったことに満足している。

二人の軌跡が交差した京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊の活動を伝える毎日新聞記事（1990年5月8日）。写真の左奥が松林公蔵さん、手前は松沢哲郎さん＝中国チベット自治区のシシャパンマベースキャンプ（標高5000メートル）で

松林 暁星中学の2年で山岳部に入った。東北の飯豊山とか、北アルプスの剣岳や薬師岳などわりと熱心に活動していて面白かった。生物の先生が顧問で「山登りをしたければ京大がいい」と教えられた。初登頂をいくつもしていたことや、当時秘境といわれたブータンに学術調査隊を出すことも聞いていた。今西（錦司）さんも知っていた。あこがれの山岳部に入るために京大に行こうと思った。

松沢 大学山岳部に入り、「これが同じ山登りか」とびっくりした。たとえばろうそくの火を吹き消すと、「ろうそくは指で芯の根元をつまんで消すんだ」と上級生に叱られた。「だって熱いでしょ？」と言うと、「おまえは理科で何習ってきたんだ。芯の根元は熱くないんだ」って指で消してみせる。科学と論理で説明されたことに感動した。先輩は先輩というだけで偉いのではなく、年間120日も山に行くなかで積み重ねた上級生の経験と知識は大きかった。上の回生は尊敬できたし、ユニークな人もたくさ

んいた。何もかも面白かった。あまり期待せず入った山岳部だが、かなり早い段階で山登りのスイッチが入った。

松林 当時、関東の大学ではスパルタの山岳部が多く、しごきもよく見受けられた。新人は重い荷物を担ぎ、リーダーはサブザックというのが普通だった。京大は「1回生は神様」という感覚があり、荷物は軽くしてもらえた。共同装備で鍋やザイルが残れば、リーダーが持った。2回生は圧倒的に体力があるし、3回生は山登りの大局観を持っていた。素直に尊敬できた。「あの人はリーダーとして偉い」とか、「人格論」みたいなこともよくやった。

瀬戸 体育会系の上下関係のヒエラルキーはなかったけど、上級生は自然に尊敬できた。

松林 医学部でも上級生を「先輩だな」とは思うけど、山岳部の上級生のように「尊敬する」という気持はなかったね。

——学問と山登りの関係は？

松沢 学問にニッチを構えるのと、この山に初登頂しようというのはほとんど同じ。自分がそこに未踏峰を見つける。登ると決めると、そこに到る方法は文献を読み、地図を探し、人の話を聞くことだ。学問研究の方法とまったく同じ。学問と山登りは双子の関係だと早くから分かった。

ロールモデルが目前にあったことも大きい。山岳部の直近の上級生と、そのすぐ上の大学院生、またその上の助手のレベルの人たち、ずーっと先に梅棹忠夫、川喜田二郎、中尾佐助さんらがいる。さらにその先に今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎という人たちが一直線上にひかえている。大学に入る18歳のとき、学者になりたいとは思っていた。どの学問をするか決められないので「哲学」と言っていた。大学に入ってすぐに「哲学」ではないと分かった。ギリシャ語とラテン語とフランス語とドイツ語を履修しなさいといわれ、そんなことをする気持ちはなかった。「この世界がどんな風になっているかを知りたい」と1年、2年、3年と山に登るなかで考えて、心理学に定位していった。山登りの直接さ、見れば分かるというものは、自分の学問をイメージするのに役立った。

——医学部は文学部とずいぶん違うでしょ？

松林 現役のころ、山登りと学問は別個のものだった。山の方に思い入れが強かったね。もちろんいい医者にはなりたいとは思っていた。そ

血液の成分どう変化

大気中の酸素の濃度が低く、い酸素を少しでも効率的に体
になると、人間の体はその少な
内に入らなければならないため、
血液中の赤血球量が増える。
昨年四月、六月、中国・新疆



ムスターグ・アタ峰で行った
第一次予備調査で、自ら脳波
などのデータをとる瀬戸隊員

ウイグル自治区のムスターグ
・アタ峰（七、五四六）で
行った第一次予備調査では標
高四、三〇〇級のベースキャ
ンプに到着後、赤血球濃度の
目安となるヘマトクリット値
を調べた。その結果、数日間
で平均八割も上昇。また、造
血ホルモンのエリスロポエチ
ンの量が通常の八割も増える

1989年、ムスターグ・アタ峰での予備調査で医学データをとる瀬戸嗣郎さん

のためしっかり勉強しようと思った。しかし、精神的に費やす時間は山岳部の方が多かった。

＜山登りに夢中になるなかで、松沢さんは5回生の1973年、ヒマラヤの未踏峰ヤルンカン（8505メートル）の登山隊に22歳の最年少隊員として参加。卒業後も、84年に日本山岳会のカンチェンジュンガ（8586メートル）縦走隊に加わった。松林さんは卒業後の82年にチベットのカンペンチン（7281メートル）、85年にナムナニ（7694メートル）、同年にブータンのマサコン（7200メートル）と、次々と初登頂に成功した。一方で、北アルプスやカラコルムで続いた遭難で、大切な仲間を失う経験もする＞

——研究や仕事で一番大切な時期にどうして再び山に行こうと思ったのか。

松沢 ヤルンカンの後、遭難が続き自分の気持ちの中で登山は封印した。しかし、そのころ日本山岳会から声がかかった。彼らとしてはたんにカンチェンジュンガの経験者がほしかっただけ。でも、「今行かねば後悔する」と思った。山の失敗は山で返さねばならない。学問では返せない。ヤルンカンでは第4キャンプの7400メートルまでしか行けなかった。あと1100メートル残してきた。ちょうど研究パートナーのアイ（チンパンジー）とも出会い、ネイチャーにも論文が載ろうという、研究者として未来が広がるという時期。「ごめん、やっぱり山行くわ」と妻に謝って出かけた。常識で考えればむちゃくちゃな話だけど。

松林 僕は現役時代ヒマラヤに行けなかった。「あこがれのヒマラヤを一度だけこの目で見てみたい」と思っていたころ、関西学院大山岳部のカラコルム遠征に隊付き医師として行く話があった。卒業して3年目の駆け出し医師が長期間休めるだろうか。悩んだ末に上司に相談すると、休みを許された。だが「最初で最後にしよう」と思ったヒマラヤで、隊として頂上に達することはできなかった。そのころ中国政府がチベットの山を開放するという情報があり、京大士山岳会（AACK）から「カンペンチンの希望者は身辺を整えよ」と指令がきた。私は、休暇の許されない天理よろず相談所病院から、比較的自由の利く鹿児島県の民間病院に移って待機した。後に聞くと、「前の病院でなにかトラブルでも起こして南国に流れてきたのでは」とうわさになっていたらしい。

＜研究者として、医師として順調にキャリアを積んでいた2人だが、「やむにやまれぬ思い」からヒマラヤ登山に参加したことがその後の研究に大きく影響する。そして別々に歩んできた軌跡が、90年の京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊（シシヤンマ）で交差した。AACKとしては異例の、初登頂を目指さない登山隊だった＞

松沢 日本山岳会のカンチェンジュンガ隊ではサポート隊員として標高8350メートルまで登った。あと150メートルで頂上に行けるのに、それをやっちはいけない。「一将功成り万骨枯る」の山登りはおかしいと分かった。

しかも選りすぐりの隊員の中で、自分は登山家としては2流だと分かった。それならば身の丈に合った、しかしクリエイティブな山登りをしたい。既にヒマラヤの8000メートル峰はすべて登られ、そこを初登頂することはできない。でも学術研究にまで視野を広げればパイオニアたり得る。それが共有する夢として、シシヤンマでは成り立った。

——松林さんはカンペンチンに初登頂し、普通なら「これからは医業に専念しよう」と思うん

じゃないですか。

松林 それまで登山は登山、医学は医学と割り切っていた。しかしチベットで高山病になられた近藤良夫隊長に付き添って「今後、山に行くなら、高所医学を本気で勉強しなければならない」と感じた。低酸素の高所で暮らす人々の生理研究も必要になる。そこで芽生えたのがヒマラヤの高所を巨大な実験室に見立てた医学研究チームのアイデア。医師のほか、心理学、社会学など多分野の研究者が駆け付けてくれた。

松沢 仲間に声をかけると、即座に「参加したい」と返事があった。みんなくすぶった夢があったのではないか。

瀬戸 シンジャパンマに参加した人たちは松沢、松林の2人にオルグされた。講師や助手クラスだった。忙しいけれど、階段の踊り場というか、こういうことができる年齢だったんだろうね。順風満帆の登山人生を歩んできたわけではなかった。むしろしゃとして、くすぶった夢みたいなものがあって、ゲマインシャフトで行こうよ、と。単純にヒマラヤに行きたいという気持ちではなかった。行くならばただ縦を目指すのではなく、クリエイティブなものを目指そうとした。

松林 シンジャパンマ登山を終えてから、数人の医師が約1カ月かけてヒマラヤ山麓の標高4～5000メートルに暮らす人々の調査を行った。そこで日本とはずいぶん異なる「老い」の有りようを知り、「老人医療は病院では完結しない。高齢者が疾患を抱えながら過ごす生活の場に向く必要がある」とひらめいた。帰国後、当時講師をしていた高知医大（現高知大医学部）で学生を誘って「フィールド医学研究会」を組織し、人口約6000人の高知県香北町（現香美市）に出向いた。そこで高齢者の「健康度」を、身体、精神面、社会的背景から包括的に調べた。あわせて検診や生活指導を行うと、介護を必要とする高齢者が減り、平均寿命も延びた。同様の調査をパキスタンのフンザ、南米アンデスのヴィルカバンパなど、「長寿の里」伝説がある地域で実施。西洋文明の浸透度と、老人の健康状態や幸福感との関連を明らかにできた。現在は坂本龍太さんら若い後継者が、ブータンで老人の検診システム構築を進めている。

松沢 僕もフィールド研究に対する目覚めは同じだったね。それまでアイを相手に実験室で認

知研究をやっていたけれど、「老人研究を病院だけでやってはいけないよなあ。チンパンジー研究も実験室だけではいけないよなあ」とはたと気づいた。その後、アフリカで3カ月間、一人で野生チンパンジーの観察を続け、フィールドでの研究を、実験室での研究と対置させるべきだと明確に意識した。そして野外での実験にのめり込んだ。人間とチンパンジーを比較することで「心の進化」を明らかにする比較認知科学という学問につながった。シンジャパンマが終わってから、学問と山登りが密接なものになった。山登りは新しい概念をつくるための触媒なんだよね。

松林 山岳部は山登りを通じて、山以外にも常になにか概念の創出をしていると思う。オールラウンド、コンプリート、ステップバイステップは山岳部で学んだ基本的概念だが、「自分で歩いて、見て、聞いて、肌で感じて、自らの頭で考えたことを学問にする」というフィールドサイエンスの考え方はあらゆる学問領域にも応用可能だ。梅棹さんの「文明の生態史観」などはその典型例だと思う。私のやってきたなかで誇れるものがあるとすれば「フィールド医学」という概念を創出した、ということが大きい。「フィールド医学」は、最初は高知医大の一学生クラブから出発したが、2000年からは京都大学医学部研究科のひとつの講座となった。医学におけるフィールドサイエンス的視点は、山登りから得た教えだと思う。

ニーナ（松沢）にしても、個々の論文よりも、参与観察とか、野外実験とかの手法を導入して比較認知科学というスタイルをつくりだしたことだよ。

——未踏峰主義？

松沢 あきらかに色濃く影響を受けている。新しい学問のニッチを探す、誰も考えてないことを考える。オールラウンドという言葉でいえば、野外も実験室もという姿勢に当てはまる。

ぼくは今西さんのフィールドサイエンスに影響を受けたと考えてはいないが、今西さん、桑原さん、西堀さんらが通ってきた京大山岳部。そこは机上の空論ではなく、山とか自然があって、ある意味残酷にエビデンス・ベースドな世界だよ。失敗すれば死ぬかもしれない。そのなかで、オールラウンドじゃなければいけないということが身に染みついた。

瀬戸 アイの研究をし、それなりの面白い結果

が得られた。普通の人ならばそれだけで満足して、それをよりソフィスティケートしていくだけで学者として満足したんじゃない？ マー坊（松林）の場合も、神経内科も、それを突き詰めればそれはそれなりに面白いはず。しかし、それだけでは本質ではないという気持ちがあったのではないか。だから、フィールドと臨床を一緒にやろうと考えた。

松沢 そうじゃないと、全き理解を得られないから。山登りという「分割できない全体」を実感し、体験しているからだろうね。

松林 高知医大から出るときに、患者を診るフィールド医療をしたいと思った。そのためには学際的なところがいいと考え、東南アジア研究所に行った。今回私は退職するが、坂本君が後任になった。高知から一緒に来てくれた人たちも、連携教授、連携准教授になった。在任中、人文系、社会系の人たちともしっかりした共同研究を組みたかったが、完全にはできなかった。今後、20年かけて坂本君にやってほしい。



4月に京大に「ヒマラヤ研究ユニット」（湯本貴和代表）が誕生した。ヒマラヤの自然環境や、そこに暮らす人々の文化、健康、さらには

気候変動に備えた防災などを学際的に研究する世界でも例のない組織だ。

「未踏の山を探して登る。それは科学研究と同じ。それまでなかった概念を創出することこそ、山登りの教えだ。北極や南極、深海を研究する組織はあるが、『第三の極地』であるヒマラヤを研究する組織はなかった。ヒマラヤはようやく探検から科学になる」

設立に関わった2人は声をそろえる。

◇京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊

低酸素状態の超高所が人体に与える影響を世界で初めて総合的に調査する目的で1990年4月から約2カ月間、中国チベット自治区のシシャパンマ峰（8027メートル）に派遣された。総隊長の戸部隆吉・京大医学部教授（当時）以下、隊員32人。うち12人は医師で、心理学者や社会学者も加わった。ニホンザル2頭も参加した。松沢さんが登山隊長、松林さんが学術隊長を務めた。斎藤惇生さん、中島道郎さんの「還暦コンビ」が登頂に成功した。

（3月28日付毎日新聞京都版記事「京大2教授が語る 山が教えてくれた科学」を加筆修正したものです）

妙高山外輪三田原山柄沢の雪崩（2015年2月）

横山宏太郎・杉山 茂（京大山岳部OB）

1. はじめに

2015年2月、私たちに馴染みの深い妙高山外輪の三田原山で、柄沢を流れ下る大きな雪崩が発生したと推定される。これに関する調査検討の結果を、2015年9月に松本市で開催された雪氷研究大会（（公社）日本雪氷学会と日本雪工学会との合同全国大会）において、杉山・横山の連名で発表した。その講演要旨（杉山・横山、2015）は本年2月に公開された（J-STAGE）が、ここでは当日の発表の内容に基づいて、より詳しく紹介する。

三田原山（標高2347m）は、新潟県南西部に位置する妙高山（2454m）の外輪山の一つで、南～南西側は広い斜面となっており、山スキーには絶好の山として、近年は特に訪れる人が多

くなっている。柄沢（涸沢と表記されることもある）は、三田原山の頂上付近から南西に下る谷で、谷筋は樹木が少なく、滑降時に利用したり、また横断することもある。筆者らは、柄沢を通過する際には雪崩に注意が必要と認識してはいたものの、実際に遭遇したことはなく、過去に発生した例があるかも不明であった。

2015年2月、妙高市在住の築田博氏のウェブサイト「火打山の風」に、「柄沢で雪崩があった」との記述が載った。筆者らはこれに関心を持ち、築田氏に詳しい情報の提供を依頼するとともに、杉山は3月から5月に柄沢とその周辺を登降し、観察と写真撮影を行った。また、防災科学技術研究所雪氷防災研究センターに依頼し、至近の観測点である「妙高笹ヶ峰」の気



写真1 2015年4月25日、柄沢の標高1790 m付近の状況



写真2 2015年4月25日、柄沢の標高1765 m付近の状況。ダケカンバ等が下流側へなぎ倒された様子が見られる

象データの提供を受けた。後述するようにそれらを合わせて検討した結果、大規模な雪崩が発生したものと推測した。

2. 築田 博氏からの情報

築田氏は妙高山系における山スキーと登山の経験が非常に豊富で、過去長きに渡り高谷池ヒュッテの管理人を務められた、この地域の精通者である。筆者らの依頼に応じて提供された情報によると、氏は2015年2月22日、三田原山の中腹をトラバースし、標高1850 m付近から柄沢に入り、標高1530 m付近まで柄沢を滑ったが、標高1700 m付近で、ブナが下流方向になぎ倒されており、また沢底に新しい木片もみられ、雪崩があったものと確信した、とのことである。木片の散乱状況から、雪崩が通過した後は、降雪はほとんどなかったと見られること、また雪崩の発生原因としては、柄沢の源頭近く右岸側に発達する雪庇の崩落の可能性を示唆された。

なお、これまでに柄沢での雪崩発生は記憶に無い、とのことであった。

3. 現地調査と結果

調査は以下のとおり、杉山が複数回現場を訪れ、観察と写真撮影を行った。

2015年3月15日 妙高杉ノ原スキー場から三田原山山頂経由、柄沢を経て京大ヒュッテ

2015年3月16日、17日、4月19日、25日、5月10日 京大ヒュッテから柄沢

3月中旬の柄沢沿いの状況としては、以下のようであった。標高1800 mで下流側へ大きく傾いた細いダケカンバが見られる。標高1600 mまでのあいだで、切断されたり折れたり下流側へ傾いたブナの幹が見られた。標高1450 m付近のカラマツ植林帯では沢身側の枝がなくなっていた。

4月後半の状況は以下のとおりであった。標高2193 mで、ダケカンバの細い幹や枝が折れていた。標高1920 mではダケカンバの太い幹が折れ、雪面上に横たわっていた。

標高1800 mあたりから下流にかけて、樹木の幹折れ、枝折れが目立ち、兩岸の林内にも倒れた樹木が多く見られた。写真1は標高1790 m付近、写真2は標高1765 m付近の様子である。標高1360 mには枝などが雪面に散乱しており、上部にあるアオモリトドマツの枝も見られた。標高1340 mに、自動車道路の除雪により現れた積雪断面には、デブリらしきものは見当たらなかった。

以上の観察結果から、柄沢の沢沿いに雪崩が流下し、兩岸の樹木を損傷しながら1360 m付近に達したと考えられる。

4. 雪崩発生点の推定

雪庇の崩落が雪崩発生の原因となることはよく知られている。柄沢では、源頭に近づく標高2200 mあたりから、右岸側に雪庇が発達するのが見られるのが通例である。雪崩発生の原因としては、築田氏も指摘されたように、この雪庇の崩落がひとつ考えられる。2015年4月で約1.5 mの高さの雪庇が見られたが、破断面な

どは確認できなかった。

20015年と2006年のこの雪庇の形状を、写真上で比較する。写真3は2006年2月11日、写真4は2015年3月17日である。この2枚の写真が撮影された日の、妙高笹ヶ峰観測点の積雪深と積雪重量を比較すると、表1のように、ほぼ同程度であった。

写真3(2006年)では、丸で囲った顕著なダケカンバの周囲の積雪が右岸の積雪と滑らかにつながっており、雪庇にはなっていない。その上下の部分も、雪庇の形はやや不明瞭である。これに対して、写真4(2015年)では、顕著なダケカンバの周辺に、他の樹木の枝先が見える。沢は顕著に深くなっている様子が見られ、雪庇の形状は、右岸を限る形で、ダケカンバの周辺も含めて明瞭に認められる。以上のことから、写真4が撮影された2015年3月17日以前に、雪庇とその下部の積雪が一部崩落したために、顕著なダケカンバの周辺の雪が2006年2月11日に比べて少なくなっている可能性がある。

次節の表2に示したような妙高笹ヶ峰観測点における短期間、大量の降雪が三田原山上部でも起こったとすれば、雪庇が急速に成長し不安定になった可能性がある。

以上から、柄沢源頭付近の雪庇崩落が、雪崩発生の原因としては一つの有力な候補と考えられる。

5. 雪崩発生時期の推定

築田氏は2015年2月22日に柄沢を滑った際に、雪崩があったものと確信されたが、氏は約2週間前の2月7日にも柄沢を通過しているので、まず、雪崩の発生は2月7日から22日の間と考えられる。一方、築田氏が「22日に、雪崩のデブリは見当たらなかったが、沢底には新しい木っ端が見られた、それで雪崩と確信した」という点からは、雪崩通過から22日までの間に、降雪は少なかった、あるいはほとんどなかった、と考えることができる。

7日から22日の間では、笹ヶ峰では表2のように3回のまとまった降雪があった。22日より前で、直近のまとまった降雪は18日から20日である。したがって、雪崩発生は、20日の降雪終了ころから22日に築田氏が柄沢を滑るまでの間と考えられる。



写真3 柄沢源頭付近、2006年2月11日



写真4 柄沢源頭付近、2015年3月17日

表1 写真撮影時の笹ヶ峰の積雪

日時	積雪深 (cm)	積雪重量 (kg m ²)
2015/3/17 9:00	409.6	1670.1
2006/2/11 9:00	438	1662

データは雪氷防災研究センターの観測による

表2 2月7日から22日の間のまとまった降雪

期間始め 月日時分	期間終わり 月日時分	積雪深増分 cm	積雪重量増分 kg m ²	降水量 mm
02/08 16:00	02/10 14:00	35.7	41.3	38.5
02/12 22:00	02/15 21:00	78.9	129.0	106.0
02/18 19:00	02/20 16:00	48.3	67.3	65.5

データは雪氷防災研究センターの観測による

6. まとめ

ここまで推測してきたとおり、2015年2月20日から22日までの間に、標高2200m以上の柄沢源頭部付近から発生した雪崩が、ほぼ沢沿いに、標高1360m付近まで流下した。すなわち標高差約900m、流下距離約2.5kmにも及ぶ大規模な雪崩が発生したと思われる。

柄沢における雪崩の発生はきわめて稀な現象かもしれないが、山スキーなどで通過や横断をする場合には、その危険性を意識しておく必要がある。

雪崩災害は、雪崩の発生圏と人間の生活・活動圏が重なった時に発生する。和泉（2005）によれば、日本は、先進国の中では雪崩災害による死亡者数が非常に多いが、1990年代に入り件数、死亡者数とも大きく減少した。そのなかで、林業・鉱工業などの作業における雪崩災害が減少する一方で、冬期レジャー関連の災害が増加し、1990年代では件数が30%、死亡者数は84%を占めているという。筆者らは、登山・山スキーを愛好する者として、雪崩事故を無くしたい、そのためには、雪崩発生例の集積も重要と考えている。

この情報が、雪崩事故防止に多少とも役立つ

ことを願いたい。

謝辞

築田 博氏には、当時の状況などの貴重な情報を、快く提供していただいた。また、防災科学技術研究所雪氷防災研究センターの山口 悟博士には、同センターの観測による妙高笹ヶ峰観測点の気象データを利用させていただいた。ここに記して深く感謝申し上げます。

文献・資料

- 和泉（2005）14.2 雪崩災害、雪と氷の事典、524-533、朝倉書店
杉山・横山（2015）妙高山外輪三田原山柄沢の雪崩（発表番号 P2-32）https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcsir/2015/0/2015_250/_pdf

第 37 回雲南懇話会（2016 年 6 月 25 日開催） 講演概要

山岸久雄、前田栄三、安仁屋政武

第 37 回雲南懇話会は 2016 年 6 月 25 日、東京都新宿区市ヶ谷の JICA 市ヶ谷ビル、国際会議場で開催され、125 名の参加を得て、盛況裡に終了しました。以下、講演の概要を紹介いたします。

雲南懇話会は、第 37 回以降、京都大学ヒマラヤ研究ユニット及び AACK との共催となりました。今後、益々のご支援をよろしくお願い申し上げます。

1. 「中国雲南省、梅里雪山 一人々の祈り、山麓の暮し」

昆明理工大学院生（当時）
斯那扎史（スナチャシ）

中国雲南省の梅里雪山（チベット名：カワカブ、標高 6740 m）はチベット仏教徒、及びボン教徒の大聖山である。カワカブ巡礼には徳欽県内の重要な聖地を回る内巡礼と、雲南省・チベット自治区に跨るカワカブの外周を一周する外巡礼とがある。カワカブの名の由来である鬼神ロンツェン・カワカブが生まれた未年となる 2015 年は、12 年に一度の大巡礼の年であった。講演者は、この年に行われた外巡礼参加者の見

聞から明らかになった、巡礼路の凄まじい変化、そして、最近のチベット人の生活や信仰の変化について語った。外巡礼路は一周 228 km であるが、現在その 7 割に車道ができ、自動車やバイクでの移動が可能になり、徒歩による巡礼は主要な峠越えに限られてきた。一周に要する日数は平均 5 日程度となり、外巡礼へ出かけるハードルは下がり、多様な人が参加できるようになった。その結果、巡礼に対する意識も変わりつつあり、徒歩経路から外れた伝統的聖地が訪ねられなくなる、ということが起こってきている。

2. 「中国チベット自治区・未踏の霊山 カイラス —四宗教の複合的聖地—」

東洋大学大学院客員教授（インド哲学・ヒンドゥー教思想） 宮本 久義

講演者は 1992 年、歴史学者の色川大吉氏を隊長とする日本西藏聖山踏査隊に参加し、カイラス山の巡礼路をたどり、巡礼者への聞き取り調査などを行った。カイラス山（海拔 6656 m。別名カンリンポチェ、マパムユムツォ）は、ヒンドゥー教、ジャイナ教、チベット仏教、ボン教の信徒たちが等しく聖山と崇める霊域で

あり、宗教ごとに、その意義付けは異なっている。その対比を通じ、チベット人、インド人の精神世界の相違が語られた。巡礼路は巨大なリング（男根）に見立てたカイラース山を中心とする 52 km の円環であり、円環はインド人にとって世界の全体性を象徴している。巡礼者は円環の中心にある聖山に敬意を払うとともに、円環に沿って巡礼することにより、世界全体を自己の内に取り込むという意義がある。巡礼路は、また、水と深く関係しており、聖なるマナサローワル湖の他、四大河（インダス、サトラジ、ブラフナプトラ、カルナーリー）の源泉はこの地に在る。これらの水は俗から聖への上昇を意味するとのことである。

3. 「ネパール、聖地 カトマンドゥー ヒンドゥー教・仏教・民俗信仰の複合一」

東京外国語大学名誉教授（文化人類学）

石井 博

ネパールの首都カトマンドゥーがあるカトマンドゥー盆地は、古くからネワール族が居住し、古代、中世においては、この盆地がネパール国そのものであった。近世の 1769 年、山岳民族はネワール族を征服してシャハ王朝を開き、その版図は現在のネパール国ほどに拡大した。カトマンドゥー盆地では諸宗教が排他的ではなかったため、仏教、ヒンドゥー教、民俗信仰が並存・複合し、その結果、人の数よりも神仏の数の方が多いとすら言われるようになり、寺院・聖所や祭礼が大変多くなっている。さらにカトマンドゥー盆地や集落自体を聖なる空間とする観念も発達してきた。講演者は、このようなカトマンドゥー盆地の文化・宗教的特徴を歴史的観点から概観し、この盆地がどのような形で「聖地」であるのか、あるいは「聖地」とされてきたのかを語り、また近現代の宗教状況の変化について語った。

4. 「インド、ブータン国境の聖地巡礼 —アルナーチャル・プラデーシュとメラの事例から—」

日本ブータン研究所 研究員、博士

（社会学：慶應義塾大学） 脇田 道子

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州西端とブータン東部の山岳地帯には地元の人々が聖地として崇める場所が数多く残されている。この地域はかつてモン、あるいはモンユルと呼ばれ、チベット中心部からは周縁とみなされ、

注目されることは少なかったが、実は、これらの聖地は仏教がヒマラヤ南麓へ伝来した黎明期を偲ばせる貴重な文化遺産なのである。講演者は、これらの聖地を 10 余年にわたり巡ってきたが、今回はその中から 5 つの聖地を取り上げ、その歴史的背景、現状と保存のための課題を語った。すなわち、①チベット歌舞劇ダーキニー・ドワ・サンモの舞台、②女神アマ・ジョモの住処—急速な近代化の中で—、③国境に点在する神秘の湖、ツォルン・ゴンパ、④神聖な湖、ダンリン・ツォー縮小するのは自然現象か？ 天罰か？、⑤ダライラマ 6 世の生誕地タワンーダム開発から守れるか？ などである。

5. 「南インドの山と森の信仰 —カルナータカ州のブータの場合—」

日本山岳修験学会会長、

慶應義塾大学名誉教授 鈴木 正宗

南インドのカルナータカ州の南部ではブータと総称される神霊の祭りが乾期（11 月～4 月）に盛んに行われている。担い手の主体は、アウトカーストで、社会的地位は低いが、祭りでは神霊が降りてくる器となり、身体にメイクを施し、巨大な飾り物を背負い、神霊の起源を語り、神がかり託宣を行う。時には故地から辿ってきた神話の再現も演じる。山や森に祀られていたブータが、ジャイナ教やヒンドゥー教と混淆し、変容してきた過程が語られた。

第 38 回雲南懇話会のご案内

1. 日時：2016 年 9 月 4 日（日）12 時 45 分～17 時 30 分。茶話会 17 時 30 分～18 時 40 分。
2. 場所：JICA 市ヶ谷ビル（旧国際協力総合研修所）国際会議場。茶話会は国際会議場横の会議室で行います。http://jica-ri.jica.go.jp/ja/about/access.html JR 中央線・総武線「市ヶ谷駅」下車。
3. 懇話会の内容（講師、演題、講演の順序など、変更ある場合は、ご了承をお願い致します）
 - ①「ネパール、ムスタンの旅」—雲南懇話会第 11 回フィールドワークの記録、2016 年 4 月— 桐蔭会山岳部 OB 会、AACK 遠藤 州
 - ②「インド・シッキム州、カンチェンジュンガ東面の山旅、2016 年 4 月」—困難な入域、

ゼム氷河、シニオルチャーの麗姿のことなど—
雲南懇話会幹事、薔薇愛好家 頭師 正子

③トピック「転換期にあるミャンマーの今、その素顔」—アウンサン・スーチー女史への期待—

NPO 法人“小水力発電をミャンマーの農村へ”代表理事、神戸大学名誉教授
大津 定美

④「ヒマラヤ地震博物館」—ネパール・ヒマラヤの環境変動研究から考える—

カトマンドウ大学客員教授、滋賀県立大学名誉教授、北海道大学山の会 (AACH)
伏見 碩二

⑤「中国の水資源・水環境をめぐって」—沿岸部と内陸部の対比から—

総合地球環境学研究所教授、AACK
窪田 順平

お知らせ

1. ホームページについて

<http://www.aack.or.jp/> は 2016 年 1 月以降は閉鎖されます。今後は <http://www.aack.info/> をご覧ください。どうぞよろしくお願いたします。

2. 来年度の AACK 総会は、2017 年 5 月 28 日 (日) を予定しております。

AACK 事務局

会員動向

編集後記

榊原さんには、今回も興味深い記事をいただき、ありがとうございました。雲南懇話会は本誌の案内が間に合わなくても盛況です。

今年は、日本の南極観測が始まって 60 年になります。次号に向けて、南極関連の原稿をお寄せくだるよう、よろしくお願いたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2016 年 10 月 15 日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2016 年 8 月 31 日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎

発行所 〒 606-8501

京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究科

竹田晋也 気付

編集人 横山宏太郎

製作 京都市北区小山西花池町 1-8

(株)土倉事務所